



愛隣幼稚園.....

園だより

.....16. 7月号

周囲で起こっていること

去年の今頃、帰宅が遅くなった週末の夜、やはり遅く帰ってきた次女と私は夕食をすることにしました。9時になろうかという週末の店で、私たちは若い夫婦が2歳くらいの子どもとやって来るのに出会いました。小学校に入るまで9時前には寝ていた娘には驚きの光景でした。また最近になって、夜遅くまで家族が誰もいない家に一人で居る小学生の話を、複数耳にするようになりました。共働きのご家庭のようで、時には深夜ということもあるようです。私たちのまわりには気付かないところで同様の環境に置かれている子どもたちがたくさん居そうです。一人で留守番ぐらいというには限度を超えています。見方によってはネグレクト(育児放棄)、虐待です。不思議なことがまかり通っています。私も両親は共働きでしたが幸いなことに祖父母が同居していましたし、少なくとも母は夕飯時には帰宅していました。母も父もない夜はありませんでした。時代が変わり、多くの共働き家庭は核家族になりました。そうです、時代は変わったのです。しかし、つい先日こんなことがありました。家庭参加日の振替で月曜休みの日、普段まともな時間に夕飯を作ることが出来ない私が、この日くらいはと娘たちの帰宅に合わせて夕飯を準備していました。初めに帰ってきたのは長女。玄関を開ける音と同時に「いや～しあわせ、しあわせ。明かりが点いてる家に帰って来るのはしあわせだね～。ご飯もあるしさあ。もう今日はひーちゃん(自分のこと、少しふざけてテンションの高い時にこんな言い方をする)ウキウキしながら帰ってきたからね。」と上機嫌で喋る娘が、まっすぐ私のいる台所へ顔を出しました。「これがいいよね～。疲れてても元気になる。母さんが家にいるのってやっぱいいよね。」24歳の娘がそんな言葉で嬉しい気持ちを表現していました。24歳の大人になった子ども(私にとって)も、親がいて温かいご飯があって、喋る相手がいる家が嬉しいのです。そう考えれば、小学生の子どもが夜遅くまで一人で家に居るなどということは、子どもの気持ちを考えれば言語道断です。おおよそ“子どもにふさわしい生活”からは程遠い。仕方がない、どうにもならないのだから・・・という声も聞こえてきそうですが、それでいいということにはならないと私は考えています。夜更かしになっている乳児も、ひとりぼっちで居る子どもたちも、みんな大人の都合でそうなっているのです。夜遅く外食に来ていた家族は氷山の一角。夜更かしをしている子どもたちは少なくともありません。本来、親がしなければならぬことは子どもの健康を守ることです。忙しい親たちがしなければならぬことは、子どもをひとりぼっちにしないことです。両親共に働きたいと考える子育て世帯が増え、保育園を大慌てで作りましたが、その子どもたちが就学した後の放課後の居場所や、平日の休みの居場所は整っていません。親が働き方を変えることができなければ、子どもたちは一人にならざるを得ないのでしょう。悲しい現実です。子どもたちの健康や安全が危惧されるところですが、同じように心の成長が心配です。嬉しい日にも悲しい日にも話を聞いてくれる人がいないとしたら・・・。温かい食事には、作る人の思いが込められています。それを受け取る経験が極端に少ないとしたら・・・。愛され大切にされた子どもは自分を大切にすることができるようになり、他人を大切にすることができるようになるという言葉が、私の頭の中をぐるぐる回っています。そうか、親が子どもたちの“子どもたちにふさわしい生活”を守るという行為は、「あなたが大切」という子どもたちへのメッセージそのものでもあるのだと、改めて確認しています。

さて、この話は愛隣幼稚園のご家庭の話ではありません。しかし、みなさんの周りで起こっている話です。近所のおばちゃん、おじちゃんとして、ひとりぼっちの子どもを知ることになるかもしれません。知ったからと言って親代わりで面倒をみることは不可能です。でも、せめて知らんぷりはせず、気にかけてほしいと思います。万が一の時には助けてください。地域のおばちゃん、おじちゃんが子どもたちを守ることができるのです。大人たちには子どもたちが“子どもにふさわしい生活”をする権利を守る責任があります。